発行所株式会社空調タイムス社
本　　社　（〒105-0013）
東京都港区浜松町1－23－2
（山下ビル）
電話代表番号　東京3433局6501
FAX：東京　3433－6505
関西支社　（〒530-0015）
大阪市北区中崎西1-4-22（梅田東ビル）
電話代表番号　大阪6312局6061
URL　https://ac-times.com

空調タイムス

THE AIR－CONDITIONING TIMES

購読料一ヵ年19,800円　発行日毎週水曜日

6 8 水

2022年〈令和4年〉
週刊
第2920号

2021年度はサウナ施設受注もあり伸長

"何でも受ける"設備業者へ

グループ各社支援する側面も

ヤブシタ
冷熱設備

空調冷熱部材メーカーのヤブシタ（社長＝森忠裕氏）のグループ会社で、道内全域を営業エリアとし、空調設備を中心に設備工事全般を手掛けているヤブシタ冷熱設備（本社・札幌市中央区北6条西23－1－12）の社長にこの4月、上田正則氏が就任した。上田社長は三菱電機冷熱プラント（入社当時の社名は三菱電機冷熱設備）の出身であり、三菱電機の寒冷地向けエアコン「ズバ暖」の開発時のメンバーだったという経歴の持ち主。ヤブシタの森忠裕社長も同じ会社の出身であり、当時は上田社長の直属の上司だった。森社長がヤブシタに移り、防雪フードを製品化する中でも両氏は連携し、ズバ暖の成長と足並みを揃えて防雪フードも進化していった。今回、上田社長にヤブシタ冷熱設備の近況と今後の方向性について話を聞いた。

ヤブシタ冷熱設備の2021年度（22年3月期）の業績は、売上、利益とも前年比110～120％で着地した。全般的に道内の物件数は減少していたと見られるが、同社においては直需顧客の改修需要が多くあり、安定的な受注量を確保した。また業界は機器の供給に揺れた1年となったが、同社は機器メーカーと早くから密に連絡を取り合ったこともあり、機器不足で取り逃す物件が少なかったことも要因。更に、函館のサウナ施設の改修工事（給排水衛生設備工事）を受注したことも業績に貢献した。この案件はビルの1フロアを全てサウナに改修する大型案件で、同社はビルオーナーから直接受注した。

上田　正則社長

同社は基本的に直需を志向している。同社が手掛ける案件の7～8割がビルや店舗の改修で、ビルオーナーの直需案件。そのほかサブコンの協力案件は2～3割程度手掛けており、数年前と比べて両者の比率は逆転した。意識的に直需案件を増やそうとしてきた試みの成果が出ている形だ。

最近の市況について、上田社長は「コロナ禍において一部のビルオーナーがビルを売りたがっている傾向がある。一方でビルを買うオーナーもおり、その際、古いビルは空調設備を改修しないと入居率が上がらない。当社はそうした案件をオーナーから受注している」と説明する。前述のサウナの案件は、デザイン系の建築設計事務所と連携して手掛けたもの。この設計事務所はヤブシタ研究所やヤブシタの本社も設計を手掛けており、様々な案件で連携を取っている。また21年度は、飲食店等のテナントの入るビルでの改修需要も、コロナ禍以前と同等もしくはそれ以上のボリュームがあった。コロナ禍で閉店した店舗の改装需要が多かったためだ。更に病院や介護老人保健施設（老健）など、感染リスクを避ける観点から工事関係者を室内に入れたくないという理由で延期していた案件が、着工にかかり始めていたことも、業績に寄与した。

22年度（23年3月期）もこの傾向は続いており、足元でも仕事量は豊富。また世界的なモノ不足の中で施主が早めに発注する傾向にあり、同社も既に冬まで案件の見通しがついているという。

同社が手掛けている工事の種類は、空調設備を中心に、給排水衛生設備、太陽光設備、電気設備など幅広い。ここには工事に関係するグループ各社の営業を同社がサポートしているという側面もある。例えばヤブシタグループで東京電力系の新電力を販売するヤブシタエネシスが、東京電力管外で受注した自家消費型の太陽光設備に関しては、ヤブシタ冷熱設備が工事を受け持っている。そのため同社は協力先として全国の電気工事業者のネットワーク構築にも取り組んでおり、22年度はこの点の施工能力を増強する。またLED照明やキュービクル設置工事なども受注し、グループの電気設備業者である関光電設に工事を依頼することもある。更に、内装工事を受注してグループの設計事務所であるヤブシタ総合設計と連携し、同社と繋がりのある協力業者に依頼することもある。

加えて、連携という意味でヤブシタ冷熱設備の根幹をなす役割が、工事業者として現場を知るがゆえの気づきをメーカーのヤブシタに伝えることだ。毎月開催される「製品検討会」で、ヤブシタ冷熱設備は忌憚のない意見をフィードバックしており、上田社長はこの点が「防雪フード専業メーカーにはできないこと」と強調する。

「空調設備に特化していたら（21年度の）着地は良くなかったと思う」と上田社長。同社のスタンスである〝何でも受ける〟が好調の主要因であり、そこでは他の設備業者にはない幅広いネットワークが強みとなっている。あわせてデザイン系の建築設計事務所と連携することも多く、今もある小規模の新築案件で、設備工事全般の設計・施工を手掛けており、新築案件への対応力も磨いていきたい考えだ。

今後の同社の方向性について、上田社長は「工事屋は口下手なので、私が広報係となって工事屋の意見をヤブシタ全体に反映させていきたい」とし、同時に「建物も電気も設備も、全て手掛けるスペシャルな設備屋になりたい。それも格好良くお洒落にやりたい」と話す。その有効性は既に21年度示されており、「すぐにでもそうなりたい」と、速度感を強調した。

なお同社は以前よりミャンマー実習生を受け入れていたが、5年目に入る中、4名中3名が特定技能者となっており、技術力が着々と向上している。設計部門でも1名国の実習生を受け入れており、今月よりもう2名を受け入れる。

東研冷機工業

加工場トータル管理が増加

技術力でヤブシタグループ底上げへ

オホーツク海沿岸、水産物の輸出向けHACCP対応で

佐賀野　雅元社長

2019年にヤブシタグループ入りした東研冷機工業（本社・札幌市白石区菊水上町3条3－37－15）は、オホーツク海に面した紋別地区で水産加工場や低温倉庫向けに冷凍冷蔵設備のメンテナンス・工事を手掛けている。同社社長の佐賀野雅元氏は機器メーカー系サービス会社出身であり、当時から東研（東研冷機工業の旧社名）とも連携する関係にあった。同社が後継者不足に悩む中で社長に就任したのが佐賀野氏だ。佐賀野社長は紋別に営業所（紋別市花園町1－4－13）を開設し、地元の漁協や水産加工会社が運営する工場や冷凍倉庫に地域密着型のサービスを展開している。佐賀野社長に近況を聞いた。

同社の2021年度（22年3月期）の業績は好調な着地となった。同社の主要顧客であるオホーツク海沿岸の食品工場では、カニ、帆立、秋味を加工しているところが多い。R22冷凍機を30年超にわたり使用しているところも多く、冷凍機の更新需要もあるが、近年では輸出に際して衛生管理面でHACCPに対応するために加工場全体で相談が寄せられるケースが増えている。具体的には、これまでなかったエアコンを設置したり、また異物混入を防ぐために換気を導入して室圧をコントロールしたりといったニーズ、更には冷蔵庫を増築する際もHACCP対応の面から人と物の動線を考慮した機械の設置位置も含めた対応が求められ、ここ数年は「加工場全体をトータルで管理させて頂いているお客様が多い」（佐賀野社長）という。なお同社はユーザー直需の更新案件をメインに手掛けているが、建築業者の依頼を受けて新築の設備工事全般を手掛けることもある。

冷媒に関しては、顧客の「まだ半分以上がR22冷凍機を使用している」と佐賀野社長。そこで同社は顧客を訪問する際には、更新を含めた中長期計画を提案している。具体的には「加工場には冷蔵庫、凍結庫、原料庫があり、冷凍機が5～10台入っていることも多く、3～5年をかけて順次更新しないと資金面でも厳しい。そこで修理して延命する機械、入れ替える機械とランク付けし、中長期計画をご提案している」（同）という。

R22冷凍機からの更新が進んでいるのはR410A採用の「ECOV DUAL（三菱電機製）。同製品は設置後にR463Aへの入れ替えが可能なため、まずはR410Aで導入し、今後の冷媒価格等の動向を見極めながらR463Aへの転換も視野に入れる。同機種の導入が進んでいる保管庫では、保管能力が500～600㌧のものが多く、冷凍機を1台で設計しているところも多い。だが更新時にはリスク回避の観点から小型機複数台からなるシステムを提案し、1台故障しても温度を維持できるシステムを構築することで、ユーザーに安心して使用してもらっている。

22年度はR22冷凍機の中長期更新計画を煮詰めた結果として、年間を通して更新工事を受注しており、業績は前年を上回る見通し。佐賀野社長は「お客様はHACCP対応もある中で、冷凍機更新は『簡単にはいかない』と深く検討され、過去のお付き合いの中で好意が形成された結果が出てきているとと思う。初心を忘れずに事業を展開していきたい」と述べた。一方で22年度は材料や機器の納期遅れに伴う工期の遅れが懸念材料。また資材高騰の影響で新築工事は例年に比べ減少傾向にある。

同社の強みは高い技術力を生かし、即座に修理が可能なこと。技術力は当然グループの他の工事会社でも重要となるため、同社に出向したグループの社員に技術を伝授したり、またオンラインで座学の勉強会を行ったりといった取り組みを進めている。22年度も「技術を水平展開してグループ全体でボトムアップし、お客様への対応力を向上させたい」（同）とし、その上で各社が持つ強みをあわせたトータルで提案に繋げていきたい考えだ。同社としても「加工ラインの選別機の設置に際して、風を当てないよう、ヤブシタの気流解析によって気流の見える化をするなど、他の会社にはできない提案ができるのではないか」（同）と期待感を示した。

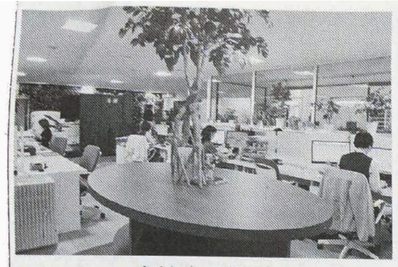
ヤブシタ

ヤブシタ研究所

札幌本社

社員が充実して働ける環境

防音実験棟と機器体感施設


本社内の様子

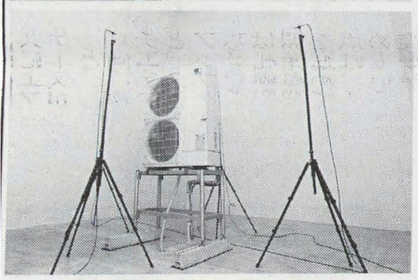
記者はこれまでコロナ禍に鑑み札幌行きを自粛していたが、今回の取材で久方ぶりに札幌を訪れた。2019年に現住所に移転したヤブシタの本社と、昨年本格運用を開始したヤブシタ研究所を初めて見学した。

ヤブシタの札幌本社（札幌市中央区北1条西9－3－1　南大通ビルN13階）は、社員が豊かに、自分らしく働くことができるようにというヤブシタ森社長の思いが込められた空間となっている。近未来をイメージしたガラス張りのエントランスからアプローチを進むと、開放的なオフィススペースに辿り着く。壁面に本物の植物を用いたグリーンウォールを設けてリラックスできる雰囲気をつくり、オフィスに隣接して託児スペースも設け、子供と共に働ける環境を整備した。更に記者が訪ねた日はちょうど、社員の福利厚生の一環として習字教室が開催されていた。「社員が一番、お客様が二番」を掲げる同社らしい、社員が充実して楽しく働けるオフィスの在り方を目の当たりにできた。また近年同社が重視している動画配信用スタジオも設けられていた。全国の機器メーカー代理店やゼネコン・サブコンに向けて新製品に関するオンライン勉強会を開催しており、同スタジオの本格的な機材を用いて高品質な配信を行っている。今後、こうした動画配信を活用した幅広い顧客にアプローチする営業と、直接訪問する従来式の営業を組み合わせたハイブリッド式の営業を定着させる意向だ。

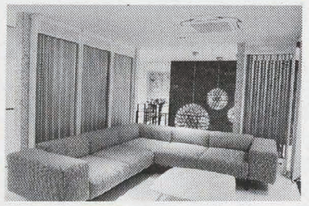
一方、ヤブシタ研究所はヤブシタ本社から車で10分ほどのところにある。研究所には、防音製品の実証試験を行うことができる半無響音棟室実験棟がある。また3階建の住宅を改装した本棟は、同社グループで取り扱う商材のショールームであり、また社員や関係者の保養所兼宿泊施設としても機能している。

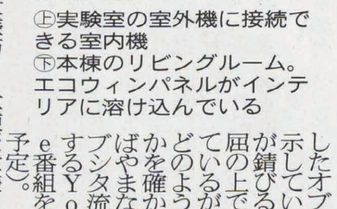
実験棟ではこの日、パッケージエアコンのサイドフロー室外機を運転し、室外機周囲の多点で運転音を計測する様子を見せてくれた。本棟の室内機と繋げて実運転の状況を再現しており、モニター室で音量の変動をチェックしていた（本棟には様々な室内機が用意されており、実証の条件にあわせて室外機と接続し直す）。実際の実験では、室外機単独の時と防音製品を取り付けた時とで運転音を実測し、その差が防音効果となる。なお今年2月に発売した、三菱電機の空冷ヒートポンプチラー「DT－RⅢ」用の「マイナス10dB仕様防音システム」は、実験棟に実機を持ち込んで防音効果を検証して製品化した。

同社は実証を重んじる。その精神を象徴するものとして、約15年にわたり道内の塩害地域に設置してフィールドテストを実施した溶融亜鉛めっき鋼板と電気亜鉛めっき鋼板を比較した寒冷地向けエアコンを運転できることに加え、エコファクトリーの輻射式冷暖房パネル「エコウィンパネル」が設置された寝室やリビング、パーパスのガスと電気を使用できる「ハイブリッド給湯システム」が接続された浴室などで、機器の稼働状況を体感できる。



㊤ヤブシタ研究所外観
㊦半無響音室での実験の様子





㊤実験室の室外機に接続できる室内機
㊦本棟のリビングルーム。エコウィンパネルがインテリアに溶け込んでいる

本棟では様々な商品や技術が展示されているが、特筆されるのが、ヤブシタ製作所のレーザー加工機で製作した、和モダンデザインの鋼製の意匠パネルやインテリア。製品としては、三菱電機の「ズバ暖」やダイキン工業の「スゴ暖」といったオブジェも展示していた。後者が錆びることは理屈の上では知られているが、実際にどのように錆びるかを確かめなければやまないのがヤブシタ流だ（関連するYouTube番組を近日公開予定）。